



ランチオンセミナー 2

メディカルパートナーとは始める アトピー性皮膚炎の 心身医学的アプローチ

座長 片岡 葉子 先生 大阪はびきの医療センター 副院長 皮膚科主任部長
アトピー・アレルギーセンター長

講演1 アトピー性皮膚炎診療における
心身医学的アプローチとチーム医療
片岡 葉子 先生 大阪はびきの医療センター 副院長 皮膚科主任部長
アトピー・アレルギーセンター長

講演2 大阪はびきの医療センターにおける
アトピー性皮膚炎診療の臨床心理士としての取り組み
森石 加世子 先生 大阪はびきの医療センター 皮膚科 臨床心理士

講演3 メディカルパートナーと取り組むアトピー性皮膚炎診療
田中 暁生 先生 広島大学大学院 皮膚科学 准教授



2021年 11月27日(土)12:20~13:20

会場

京王プラザホテル

B会場 4階花A

講演 1

アトピー性皮膚炎診療における心身医学的アプローチとチーム医療

片岡 葉子先生 大阪はびきの医療センター 副院長 皮膚科主任部長 アトピー・アレルギーセンター長

アトピー性皮膚炎は患者QOLに大きな影響をあたえる。不登校、就労困難、ひきこもりなど社会的損失をきたすことも少なくない。またストレスでアトピー性皮膚炎が悪化することも周知のことである。さらにアドヒアランスを考慮しなければ治療に成功しない。一般に疾病の成立・持続には、生物学的因子、心理的因子、社会的因子の3つの因子が相互関係をもって関与し、問題が固着しているときには悪循環が形成されていると考えられる。これらの因子を全人的に把握し、悪循環を良い循環に修正すべく介入、サポートするのが、心身医学の基本である。つまり問題の解決には全人的なアプローチが求められる。しかし、患者の全体を一人の医師が把握し、治療計画、実行するには限界がある。そこに活用されるのが多職種の専門職によるチーム医療である。大阪はびきの医療センター皮膚科では2009年から医師、看護師、薬剤師、栄養士、臨床心理士、ドクターズクラークの他職種によるチームで“アトピーカレッジ”を運営し、現在までに1800余名の成人アトピー性皮膚炎患者の寛解導入をかねた教育入院および、退院後proactive療法へ移行するサポートを実行し、成果をあげてきた。近年、日本アレルギー疾患療養指導士(CAI)認定機構も発足し、アレルギー診療においても、チーム医療がますます重要となってきている。アトピーカレッジの理念とチーム医療の意義、その中での医師の心得について概説する。

講演 2

大阪はびきの医療センターにおけるアトピー性皮膚炎診療の臨床心理士としての取り組み

森石 加世子先生 大阪はびきの医療センター 皮膚科 臨床心理士

当センターにおいて、アトピー性皮膚炎診療に臨床心理士として取り組んでいるのは、入院患者対象の教育プログラム「アトピーカレッジ」に組み込まれている「ストレスマネジメント」と、通院患者対象の皮膚科診察と併行した「心理カウンセリング」です。「ストレスマネジメント」は、アトピー性皮膚炎とストレスに焦点をおいた心理教育プログラムです。アトピー性皮膚炎に因るストレス、ストレス対処法として有効なリラクゼーション法の紹介と体験、グループディスカッションなどで構成されています。グループディスカッションでは、アトピー性皮膚炎に関わることをはじめ日常生活の様々なストレス体験が表され、参加者数名に受けとめられます。それにより他者の受けとめ方を知ることができると同時に、アトピー性皮膚炎の症状による苦しみや自己管理の困難さも共有されます。これまでの苦勞が癒やされて、治療に前向きな気持ちが表現されます。また、アトピーカレッジを受講して、長年の診療におけるデータや根拠に基づく正しい治療法を学び、アトピー性皮膚炎に対する認識が大きく変わって、「治る」希望を初めてもつことができた心境も語られます。「心理カウンセリング」では、アトピー性皮膚炎によるストレスと共に日常生活のストレスの解決も探求しています。仕事のストレスが語られる中で、他者のある態度に対する怒りが、アトピー性皮膚炎のことで幼少期に受けた態度に類似していると気付かれ、苦しかった過去を振り返って、心の整理をされることがあります。症状が改善されて、アトピー性皮膚炎の労苦から、これまで思い描けなかった自活や結婚などの人生の体験に挑戦する意欲が語られることもあります。また、アトピー性皮膚炎の自己管理は、患者本人の主体的な努力が求められますが、発達障がいをもつ場合、患者単独では自己管理に大きな困難を伴い、家族の理解と支援が必要です。そこで家族カウンセリングも行い、発達障がいの特性の理解につなげ、患者本人の感情と家族の負担を考慮した最良の方法を模索しています。セミナーでは、上記で述べたような当センターにおいて臨床心理士が担当していますアトピー性皮膚炎診療の取り組みをご紹介致します。

講演 3

メディカルパートナーと取り組むアトピー性皮膚炎診療

田中 暁生先生 広島大学大学院 皮膚科学 准教授

アトピー性皮膚炎診療では、①日常生活における助言、②スキンケア指導、③薬物療法が基本となります。日常生活における助言は、古くからハウスダスト、ペット、食物などの悪化因子についてフォーカスが当たり、部屋の掃除の頻度や方法、ペットを飼っているときの対策などが論じられてきました。しかし、これらの悪化因子は全ての患者に当てはまるものではなく、画一的な対応は患者や家族の生活を不必要に制限してしまいます。そのため日常生活の助言は、患者から収集した情報に基づいた個別の対応が必要となるため、ある程度の時間が必要です。そして、このような形で適切な生活指導を受けた患者は、医師や医療スタッフへの信頼感が増し、治療アドヒアランスが上がります。アトピー性皮膚炎治療は、生物学的製剤や内服JAK阻害薬などの新しい治療方法が登場し、大きく変わろうとしています。しかし、そのような薬剤を使用するとしても抗炎症外用薬の併用は必須であり、アトピー性皮膚炎の治療効果は、患者の外用のやり方によって大きな差が出ます。そのため、治療薬の選択や処方だけではアトピー性皮膚炎の治療はうまくいかないことは当然であり、診察の中で外用方法の指導や患者の外用アドヒアランスを高めるような工夫を行う必要があります。そうは言っても現在の日本の外来診療体制では診察医が、日常生活の助言、スキンケアや外用方法の指導、治療アドヒアランスを高め、維持するようなサポートを行うことは時間的に非常に難しいです。しかし、メディカルパートナーにこれらの一部を担ってもらうことで、理想的なアトピー性皮膚炎診療に近づくことができます。本講演では、メディカルパートナーと取り組むことによって、どのような診療が可能かについて聴講の先生方と一緒に考えます。